

マラウイの現場から

第1回 マラウイの農民の自立を目指して（原稿執筆：公益社団法人青年海外協力協会（JOCA））（2014年1月掲載）

「今の私の家には電気が灯りテレビがつき、子供の学費も払えるようになりました。」ニンニクやタマネギの生産で収入をあげた女性が自慢げに話してくれました。彼女のグループは、販売価格があがる時期にメンバーで共同出荷できるよう、計画的に作物をつくっています。



販売値の上昇を待つ貯蔵庫内のタマネギ。 収穫したニンニクを選別する農家。今後は
売上げからトウモロコシ製粉機を購入した。 サイズや品質による商品価値の向上を目指す。

こういった嬉しい声は、一朝一夕に聞かれるようになった訳ではありません。プロジェクト開始当初、援助を受けることに慣れきっていた村人達の殆どは種や肥料、ポンプ等、モノの支援を期待していました。それでも、援助をする側も受ける側も、モノの支援に頼る意識を変えなければ、真の自立発展はあり得ないとの考えから、(1)原則的にモノの支援はなし、(2)発想の転換をする、(3)自分たちで考え行動する、(4)地域資源を活用する、という4方針を掲げて農民に意識改革を促してきました。

主食のトウモロコシに加えて葉物野菜やトマトの栽培、堆肥作り等の研修から始めた本プロジェクトでしたが、モノの支援がないと分かれると去るという予想通りの行動を取る農民もいました。しかし、残った農民達が、ほとんど化学肥料を使わずに堆肥主体で立派な作物を作り、次第に現金収入を増やしたことで、周辺農民の意識にも変化が起こり始めました。また、学んだことを周囲に伝える農民を育てたことで、栽培技術研修に関しては最終的に約8割が農民自身で実施される等、プロジェクトの成果が波及し始めました。

特に成功したのは、生産多様化のために導入したニンニク生産です。6キログラムの種ニンニクから栽培を始め、プロジェクトには直接参加していない農民も含めて栽培が広がった結果、地域のニンニク生産量は約20トンにまで増加し、生産農家の収入は大幅に増加しました。



来村者に自分のノートを見せ、作付けカレンダー
ーや収支記録について説明する先進農家



初めは一株からスタートした。今や周辺農民に
苗販売を依頼されるイチゴ栽培の先駆者

「モノをやらずに何ができるのだ」と囁かれたこともありましたが、プロジェクト終了にあたり、マラウイ農業大臣からは「これこそが農民の自立を促すプロジェクトである、全国レベルに波及させたい」とのコメントを頂きました。また本プロジェクトの成果を見たマラウイ最大の農業大学からは、このプロジェクトの「農民から農民へ」という技術普及方法をカリキュラムに組み込みたいと依頼を受け、実際に本年度からのカリキュラムに組み込まれることになりました。今後とも、農民、政府、大学、その他の組織・団体を巻き込みながら、更に波及が進むことを期待しています。



プロジェクト引き渡し式にて農民の説明に
聞き入る農業大臣



ブンダ農業大学にてプロジェクト普及手法に
ついての講義風景

本コラムの内容はODAメールマガジン 250 号に掲載されました。JOCAの本件プロジェクトは2012年12月に終了、現在は終了した事業の成果を更に展開させるため、新たな事業開始の準備を進めています。(2014年1月現在)